

17. ^{99m}Tc -PMT シンチグラフィ——肝細胞癌の治療経過に伴う描出態度の変化を中心に——

片野 進 館野 和美 中島 信明
(静岡県立総合病院・放)
伊東 和樹 服部 文雄 田中 孝
小島 紘一 (同・消化器)

肝胆道系イメージング剤である ^{99m}Tc -N-pyridoxyl-5-methyltryptophan (^{99m}Tc -PMT) は肝細胞癌に特異的に集積し、これを用いたシンチグラフィの、肝腫瘍性病変の質的診断への有用性が高いことが報告されている。

当院でも肝細胞癌の診断に ^{99m}Tc -PMT シンチグラフィを応用しているが、今回は治療経過に伴って描出態度が変化することに着目して、肝細胞癌症例 35 例について検討した。

陽性例は、治療による病巣の消長を良く反映し、CT, US などでも再発の有無の診断に迷うような症例において、有用な情報を与えると考えられた。

18. 原発性胆汁性肝硬変評価における肝シンチグラフィと肝胆道シンチグラフィ

油野 民雄 横山 邦彦 高山 輝彦
秀毛 範至 絹谷 清剛 利波 紀久
久田 欣一 (金沢大・核)

病理組織学的病期分類の確定した原発性胆汁性肝硬変症 15 例を対象として、 ^{99m}Tc -コロイド肝シンチグラフィと ^{99m}Tc -IDA 肝胆道シンチグラフィの有用性につき、比較検討を試みた。肝シンチグラフィ、肝胆道シンチグラフィはともに、病期の進行度を評価するのに有用であった。また病期の早い時点で肝内の異常の有無を捉えるには、肝シンチグラフィよりも肝胆道シンチグラフィの方が有効であり、その際肝実質内全体の ^{99m}Tc -IDA 停滞像が最も高頻度に認められた。以上より、どちらか一方の検査で原発性胆汁性肝硬変を評価するとすれば、肝シンチグラフィよりも肝胆道シンチグラフィの方が有用と思われた。

19. TI-201 SPECT による肺病巣の診断：組織像との対比

利波 紀久 横山 邦彦 滝 淳一
瀬戸 幹人 秀毛 範至 絹谷 清剛
中嶋 憲一 道岸 隆敏 油野 民雄
久田 欣一 (金沢大・核)
高山 輝彦 (同・医短)

TI-201 を 222-370 MBq (6-10 mCi) 投与して 15 分後と 3 時間後に胸部を SPECT 撮像し、病巣が描画された場合に病巣と対側健常肺に関心領域を設定して集積比を求め、これらより病巣での TI-201 停滞の程度を表す指標 Retention index を求め検討した。TI-201 は原発性肺癌に非常に良く集積し、組織型での検討では低分化腺癌は高集積を、高分化腺癌と扁平上皮癌は低集積を示した。TI-201 停滞は小細胞癌、低分化腺癌、大細胞癌では強く、高分化腺癌と扁平上皮癌では弱かった。TI-201 は肉芽形成、器質化しつつある良性病巣にも集積した。しかし、集積比、停滞率は悪性病巣に比べて低かった。本法は肺病巣の良性悪性の鑑別診断のみならず、原発性肺癌の組織型について推察できることが確認された。

20. 肺悪性腫瘍に対するタリウムシンチの評価

仙田 宏平 中条 正雄 嶋田 博
横山 恵太 近藤 公雄 丸山 邦弘
(国立名古屋病院・放)

肺タリウムシンチの画像所見(病巣、肺野ならびに縦隔等濃度)をスコア化して、早期および遅延像における肺癌等の検出能を比較した。また、同時期に施行したガリウムシンチ所見と同様に比較し、本検査の意義を検討した。タリウムシンチは、TI-201-chloride を約 222 MBq (6 mCi) 静注し、20 分後に早期像を、3 時間後に ECT を加えて遅延像を撮像した。対象は原発性肺癌 29 例を含む計 54 例(男性 34, 女性 20; 年齢 59.4 ± 12.0 歳)であった。

タリウムシンチは、心筋および胸壁筋への集積が障害となるが、ガリウムシンチと比べ生理的な肺門集積がなく、遅延像においていずれの組織型の肺癌でも比較的高い病巣集積が見られた。早期像と遅延像における病巣集積は、肺癌と良性肺疾患との間で異なり、腺癌では遅延像でより高い傾向を認めた。